

# キリスト教研究所についての随想

澁谷 浩

私は明治学院大学に丁度30年勤務し、一昨年の四月以来聖学院大学（埼玉県上尾市）に勤めている。そろそろ定年まであと何年とかいう類の話にリアルな関心をもって耳を傾ける年齢になった。まことに単純な来し方で、約30年教室で黒板に向って席に就いており、次の30年は向きを変えて黒板を背にして教壇に立っただけの生涯である（これは西田幾多郎から拝借した名言）。

キリスト教研究所には、30年の勤務期間の後半に所員として在籍していた（と思われる）。元来この研究所はキリスト教学担当の教員諸氏の研究機関だったのが、いつだったかキリスト教研究に関心を持つ教員全体に解放したのである。私もその時参加した者の一人である。（こういう年表に類する記事はこの号のどこかに載っているだろう。）以後明治学院を辞するまで私は所員であり、所長を二期勤めたこともあった。所員としても所長としても、私は積極性に乏しい事なかれ主義をモットーにしていたことを今更ながら恐縮に存ずる次第である。

とは言うものの、どんな消極人間もこんなに長い間一つ所に勤めていれば、多少とも経験の積み重ねも出来てくるものである。その経験をもとにして若干のお願いを研究所に呈上したい。

私が去って間もなく、明治学院大学では重要な制度改革が行われた。学長クリスチャン・コード廃止である。この種の改革はとかくドミノ効果を産み出しやすい。しかし、そのような予測は、すでに門外漢たる私の為すべきことではないだろう。

私が門外漢として言いたいことは、研究所の共同研究（つねに複数あるはずだが）のうち少なくとも一本は日本研究をテーマとするものであってほしい。政治や経済や社会福祉やとキリスト教をからめたものものことを行っているのではない。『キリスト教「と」日本』、『キリスト教「の」日本』というような、キリスト教研究所の研究に馴染むテーマを指す。なぜそんなに日本に拘わるのか。歴史的宗教としてのキリスト教は真空の中で純粋培養できるものではない。ところが、われわれは欧米のキリスト教が普遍的———ということは真空的———な正真正銘のキリスト教だと思って……。いや、ここで神学的議論を上下させることは適当ではあるまい。もっと具体的なことを論ずべきである。

日本のキリスト教の過去・現在・未来を理解する仕事。こんな研究を共同で進めている研究所が今の日本にあるとは思えない。欧米諸国のさまざまな施設でキリスト教研究が行われるとき、かれらがやっていることはイギリスならイギリスのキリスト教の研究、ドイツならドイツのキリスト教の研究……。以下同様。われわれ日本人だけが、「日本研究をやっている」

と政治学・経済学・歴史学そしてキリスト教について言うのである。東京などの大きな書店に行くと、「日本研究コーナー」という特別の売場が設けられている。そしてそこでヴァン・ウォルフレンや山本七平などの本が並べられている。ところが、たとえばロンドンなどの大きな書店に行っても「イギリス研究コーナー」などありはしない。それはイギリス人が自分の国の研究をしないからではない。実はその反対で、その書店の本棚全体がイギリス研究コーナーだからである。したがってイギリス研究コーナーなど馬鹿馬鹿しくて設置することはできない。わが国の学者はあなたも私も、ネコもシャクシも外国のことばかりやっているから、日本研究書という風変りな珍本のために特別のコーナーを設けるのである。

明学のキリスト教研究所も紀伊国屋や八重洲ブックセンターのまねをしていないか。日本のことは何も知らないアメリカ学者やドイツ学者の集団に成り下ってはいないか。われわれの置かれた状況の正確な把握のためには、日本キリスト教史やそこに登場する指導的立場にある人びとの個別研究こそ共同研究の重要な、おそらく最も重要なテーマの一つでなければならない。そういうテーマと真剣に取り組む研究所であれば、明学のキリスト教はわが国の同じような研究所の中で最も注目に値する存在となるであろう。

(しぶや ひろし

元所長、法学部非常勤講師)